弘前大学教育学部紀要　第128号：65～74（2022年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 128：65～74（Oct. 2022）

中学校英語検定教科書の語彙的分析
―小中連携した英語教育を目指して―

Analysis of Vocabulary in Junior High School English Textbooks : Regarding Linkage of English Education Between Elementary School and Junior High School

佐藤　　剛*・伊藤こころ**・内海　里菜**・大島梨理香**
Tsuyoshi SATO*・Kokoro ITO**・Rina UTSUMI**・Ririka OSHIMA**

佐藤　ゆき**・瀧本　遥陽**・竹谷もも香**・村木歩乃佳**
Yuki SATO**・Haruhi TAKIMOTO**・Momoka TAKEYA**・Honoka MURAKI**

要旨

本稿は，中学校１年生の英語検定教科書である，*Blue Sky*（啓林館），*Here We Go !*（光村図書），*New Crown*（三省堂），*New Horizon*（東京書籍），*One World*（教育出版），*Sunshine*（開隆堂）の６つを，語彙の視点から分析・分類することで，小学校の教科書に出現する語彙が，中学校１年生の教科書本文をどれくらいカバーするのかについて考察するものである。さらにそこから，小中連携した効果的な語彙指導の在り方も検討する。具体的な研究方法としては，『小学生のための受容語彙リスト1000』（佐藤，2021）の中学校１年生用の英語検定教科書におけるカバー率を200語ごとのバンドに分けて算出した。結果として，語彙リストの200～1000語レベルの単語が各教科書で８割程度出現しており，残りの２割が中学校１年生の教科書のみに出現する単語であることが明らかになった。言い換えると，小学校の教科書に出現する語彙で，中学校１年生の教科書の８割程度をカバーすることが可能なのではないかという示唆を得た。

キーワード：教科書分析・語彙指導・カバー率・小中連携

１　はじめに

小学校では，2020年度から新学習指導要領が全面実施され，小学校５・６年生では教科としての外国語の指導が開始された。さらに，中学校では2021年度から新学習指導要領が全面実施され，教科化された小学校での外国語の指導を受けて指導が行われている。語彙の指導に関して，小学校では，600語から700語，中学校の３年間では1600語から1800語，高等学校の３年間では1800語から2500語を指導することが明示され，より一層小中高の連携した指導が求められている。福島（2017）は，小学校英語と中学校英語の接続や連携の問題がこれまでどのように取り上げてきたのかを観察した。「連携」には，「目標の一貫性」「指導法の継続性」「学習内容の継続性」の３要素があるとし，その中でも「指導法の継続性」が重要であると述べている。また，教員の関心として，一般的に小中の接続や連携に対する関心はさほど高くないように思われ，インタビュー調査でも，「中学以降は習得が中心になっていて小学校とのギャップがある」「中学校との接続をもっと意見交換しながら進めていくべきだ」という意見も挙がっている。また，鈴木（2020）は，小学校６年生における初期文字指導が中学校１年生の学習意欲や音素認識に与える影響を明らかにした。その結果，小学校６年生で学習した音素認識が中学校１年生でも維持されていることが分かり，小学校６年生での継続的で段階的な初期文字指導が可能であり，効果が

＊　弘前大学教育学部
＊　Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University
＊＊弘前大学教育学部学校教育教員養成課程
＊＊ Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

あることが示された。つまり，小学校での学習指導に基づく中学校での指導継続の必要性が示唆されている。

そこで本稿では，中学校英語の検定教科書に目を向け，小学校での学習語彙が中学校の教科書のどれくらいをカバーするのか（カバー率）を算出することで，効果的な小中連携した英語教育の在り方を語彙の面から検討・考察するものである。そうすることで，英語の授業設計時の一助になるのではないかという着想に至った。

2　先行研究

小学校で英語が正式に教科として指導される2019年度以前から，小中の教材の出現語彙の分析に関する研究は多く行われてきた。渡慶（2021）は *We Can! 1* と *We Can! 2*の出現文型の頻度と題材の関係について明らかにすることを目的として研究を行った。その結果，以下のことが分かった。まず，目標文型の出現については，35種類の文型が抽出された。次に，出現する文型と第２言語早期習得研究および CEFR-J Grammar Profile（A1）で出現する文型の約88％に整合性があるが，現在進行形，所有格 -s’，規則動詞（enjoy を除く），三人称単数形 -s，We are ～ . の５つの文型は出現しないことが分かった。最後に，出現する文型と題材の関連では，児童の思い出や夢，自分や他人，児童の身近な生活，日本や外国の４カテゴリーで横断的に頻出する文型９つを抽出し，特に I like apples, I'm ～ , She can swim fast, I want to ～の文型が横断的に出現する頻度が高いことが分かった。以上のことから，今後の調査では教科書の語彙の出現も含めて総合的に児童の英語習得達成度を検証する必要があると示唆した。

中條他（2007）は，小中高英語教科書にどのような語彙が多く出現し分布するのか，小中高英語教科書の語彙にはどの程度の重複があるのかを検証するため，小学校英語テキスト５種14冊，小学校英語指導書11冊，中学校英語教科書６種18冊，高校英語教科書16種48冊を定量的な側面から分析した。その結果，小学校英語テキストおよび指導書に出現した語彙の総計は，異語数2,703語，延べ語数85,078語であった。中学校英語教科書に出現した語彙の総計は，異語数＝1,690語，延べ語数＝41,344語であった。高校英語教科書に出現した語彙の総計は異語数8,023語，延べ語数371,021語であった。また，その語彙が何種類のデータソースに出現するのかを示す指標であるレンジ（range）の考え方を用いて，ある一定基準以上のレンジの語彙を，各学校段階の教科書に幅広く出現した「基礎語彙」として定義し，小中高における基礎語彙をそれぞれ比較した。その結果，二者あるいは三者間には約40% にのぼる867語の重複部分があり，重複部分を除いた語彙数の累計は 1,288語であった。この1,288語は 小中高それぞれの「基礎語彙」を統合した語彙数であることから，我が国の学校英語に必須の「学校英語基礎語彙」と考えた。小学校基礎語彙のみに現れる語は150語，中学校基礎語彙のみに現れる語は25語，高校基礎語彙のみに現れる語は533語であり，小中で重なる語は311語，中高では503語，小高では340語であった。そして，小中高に共通して出現する語は287語であった。さらに，287語のうち４分の１（74語）のみが機能語で，残りは名詞，動詞等の内容語であった。

長谷川・神谷（2014）は児童用英語教材と中学生用英語検定教科書にはそれぞれどのような基本的な活動（Basic Activities）と発展的な活動（Advanced Activities）が含まれていて，互いにどのような共通点や相違点，関連性を持つのかを調査し，児童用の英語教材は中学校用英語検定教科書にどのように応用できるのかを研究した。その結果，「挨拶」や「教室英語」をはじめとし，「自己紹介」や「職業」，「案内」や「買い物」など，多くの Basic Activities が児童用英語教材と中学校英語検定教科書で共通することが明らかになった。また，中学生用英語検定教科書の Advanced Activities には，児童用英語教材の Basic Activities を複雑にしたものと児童用英語教材の複数の Basic Activities を複合したものの２種類の活動があることを示した。

佐藤（2019）は，佐藤（2018）の『小学生のための受容語彙リスト』を用いて，小学校で主たる教材として使用されている中学年向けの *Let’sTry!1*，*Let’s Try!2*，高学年向けの *We can!1*，*We can!2*，中学１年生の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1*（学校図書）と *NEW CROWN ENGLISH COURSE 1*（三省堂）の本文および教師用指導書に見られる，教師や児童の発話例における語彙のカバー率を分析した。佐藤（2018）の小学生のための受容語彙リストは，200語レベル，400語レベル，600語レベル，800語レベルのリストで構成されており，それぞれの教材がレベル別に含まれている語彙をどのくらいカバーしているのかを分析している。結果として，カバー率は200語レベルではおよそ60％～70％，400語レベルでは10％程度，600語レベルでは３～５％，800語レベルでは１％程度と，小

学校中学年用の教材から中学校１年生用の教材を通して同様の結果を得た。しかし，これらの研究は，教科改善の教材を研究対象にしたものであり，平成29年度公示の学習指導要領（文部科学省，2017）に対応した検定教科書を対象にした研究はまだまだ数が少ない。

また，小中連携した英語の指導の在り方について，小学校での英語の教科化をうけてますます重要となると考えられる。中村他（2010）は，小学校英語が中学校英語にどのような影響を及ぼすかについて，小学校英語を積極的に行っている小学校出身者とそうでない小学校出身者がともに進学する中学校の１・２年生を対象とした語彙機能に関するアンケート調査を行った。その結果，小学校英語を経験してきた生徒は，英語の音声と意味をダイレクトに結びつけることができ，それは小学校の語だけでなく，中学校の語でも同じように言えることが明らかになった。このことから，英語教育における小学校と中学校の連携は，効果的な語彙学習において重要であることが分かるとしている。鈴木（2020）は，小学校６年生に行った初期文字指導が中学校１年生の学習意欲と音素認識能力にどのように影響するかを小学校６年生22名に追調査した。その結果，小学校６学年で学習した音素認識が中学校でも維持されていることが分かり，また，小学校で段階的な文字指導を継続的に行うことにより，児童が文字の学習を肯定的に捉えていることが分かった。しかし，小中での段階的で継続的な指導の効果については明らかになっていない。小学校での学びを汲んだ中学校での文字指導を実践し，その効果について明らかにする必要があると結論づけている。早瀬（2017）は日本の小学校外国語活動では「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが大きな目標として掲げられていることに着目し，４技能の視点から『小学校学習指導要領』（文部科学省，2008）を分析した。そこから「聞くこと」「話すこと」は積極的に導入しているが，「読むこと」「書くこと」に関しては消極的な姿勢を見せていることが現状の課題であると考えた。そこで「読むこと」「書くこと」は小学校の段階では必要ないのであろうかという疑問から，授業の基盤となっている検定教科書の分析を行った。具体的な方法としては，日本・韓国・中国の小学校英語教育でそれぞれ最も多く採用されている検定教科書を１種類ずつ選び，４技能の視点から詳細な分析を試みた。その結果，韓国・中国の教科書では学年が上がるほど教科書における「読むこと」「書くこと」の割合が増えていることが明らかになった。一方，日本の教科書に見られた「読むこと」「書くこと」の増加量はごく僅かであった。ここから，さらに児童の発達面からの研究，そして日本の英語教育体制の現状を含め，今後小学校の英語教育の発展を考えていく上で検討していくべき重要な点であると結論づけている。

３　リサーチクエスチョン

本研究では，平成29年度公示の中学校学習指導要領（文部科学省，2017）下の中学校１年生用の英語検定教科書と小学校外国語の学習語彙とを比較することによって，中学校１年生の英語で扱われている語彙の特性を分析し，小学校と連携のとれた望ましい中学校英語の語彙指導の在り方を考察するものである。そのため，以下の３つのリサーチクエスチョン（RQs）を設定した。

RQ１　中学校１年生の英語検定教科書に出現する語彙では，それぞれ総語数・異なり語数において教科書ごとにどのような特徴や差異が見られるか

RQ２　中学校１年生の英語検定教科書において，小学校の学習語彙が占めるカバー率は単語レベルごとにどの程度か

RQ３　中学校１年生の英語検定教科書と小学校外国語の検定教科書に出現する語彙では，高頻度語においてどのような特徴や差異が見られるか

４　研究方法

４．１　分析対象

本研究で分析の対象とするのは，中学校１年生用の英語検定教科書である，*Blue Sky*（啓林館），*Here We Go !*（光村図書），*New Crown*（三省堂），*New Horizon*（東京書籍），*One World*（教育出版），*Sunshine*（開隆堂）である。本文のみを分析対象とし，リスニング問題や目標文，歌詞や巻末の辞書などは分析対象から除外した。

参照する語彙リストは『小学生のための受容語彙1000』（佐藤，2021）である。このリストは平成29年度公示の学習指導要領（文部科学省，2017）下で７社から出版された小学生用の外国語検定教科書に出現する語彙を Average reduced frequency を基準にしてリスト化したものである。

分析に使用したソフトウェアは，語彙プロファイリングにおけるコーパス言語学の調査を実行する際に，多くの研究によって広く使用されているコンコーダンサー AntConc（Version 3.5.9）（Anthony, 2020）と

AntWordProfiler（Version 1.5.1）（Anthony, 2021）である。

4．2　実験手続き

上記4．1に挙げた教材における，『小学生のための受容語彙リスト（佐藤，2021）』のカバー率を考察するにあたって，６社の中学校１年生の検定教科書をテキストファイル（.txt）の形式でデータ化した。より妥当な結果を得ることを目的として，各データに，以下のようなスクリーニング作業を行った。

（1）How are you? のような２語以上で意味をなす連語などは分けて分析する。
（2）複数形は単数形として分析する。ただし shoes のような一般的に複数形で用いるものは単数形にはせず，複数形のまま分析する。
（3）Ken，Taku，Nana's など検定教科書内に登場する人名は分析対象から削除する。
（4）所有格を示す名詞＋'s は，'s を消して名詞だけ分析対象とする（people's は people として分析する）。

4．3　データ分析

データ分析に当たっては，使用教材の英文をテキストデータ化した上で，コンコーダンサー AntConc（Version 3.5.9）（Anthony, 2020）　と AntWordProfiler（Version 1.5.1）（Anthony, 2021）を使用し，以下のような分析を行った。

まず，６社から出版されている平成29年度公示の中学校学習指導要領（文部科学省，2017）下の中学校英語検定教科書それぞれの差異や特徴を比較するために，総語数と異なり語数表を作成した。

次に，中学校英語教科書がどれだけ小学校の語彙リストをカバーできているかを明らかにするために，それぞれの単語レベルごとの総語数と異なり語数およびカバー率を算出した。

最後に，小学校と中学校の教科書を比較するために，レベルごとの高頻度語上位20語リストと，中学校独自の高頻度語リストを作成した。

5　結果と考察

5．1　教科書ごとの総語数と異なり語数

教科書ごとの Type（異なり語数），Token（総語数），TTR（総語数に占める異なり語数の割合）は以下の表１から表６に示すとおりである。

上記の表１～６から，教科書間において異なり語数，総語数ともに差が見られることが分かる。異なり語数においては最大で100語程度，総語数においては最大で2,900語程度の差があることが分かる。これは中学校1学年終了時に使用する教科書によって，学習する語彙に大きな差が出ることを示すものであり，主に公教育で使用されることが目的である教科書の特性を鑑みても，何からの対応が必要であると考えられ

表１
検定教科書コーパスの基本データ（Blue Sky）

Type（異なり語数）	919 語
Token（総語数）	6586 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.140

表２
検定教科書コーパスの基本データ（Here We Go）

Type（異なり語数）	1100 語
Token（総語数）	7462 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.147

表３
検定教科書コーパスの基本データ（New Crown）

Type（異なり語数）	1130 語
Token（総語数）	7079 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.160

表４
検定教科書コーパスの基本データ（New Horizon）

Type（異なり語数）	981 語
Token（総語数）	8776 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.112

表５
検定教科書コーパスの基本データ（One World）

Type（異なり語数）	1005 語
Token（総語数）	8468 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.119

表６
検定教科書コーパスの基本データ（Sunshine）

Type（異なり語数）	904 語
Token（総語数）	5868 語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.154

る。具体的には使用する教科書に応じて，オーラルイントロダクションやリプロダクションを行う際に積極的に不足している語彙を導入するなどの指導の工夫が考えられる。

５．２　単語レベルごとの総語数と異なり語数およびカバー率

それでは，『小学生ための受容語彙リスト1000』（佐藤，2021）が中学校の検定教科書に占めるカバー率はどれくらいなのであろうか。『小学生ための受容語彙リスト1000』に含まれる1000語を200語レベルごとに区切り，レベルごとのカバー率を Type（異なり語）と Token（総語数）のそれぞれで算出した結果を以下の表７に示す。

表７
単語レベルごとの総語数と異なり語数およびカバー率

語彙レベル	Token	カバー率	Type	カバー率
200 WL	21850	49.39%	186	7.93%
400 WL	5730	62.34%	190	16.03%
600 WL	2613	68.25%	182	23.79%
800 WL	3633	76.46%	172	31.12%
1000 WL	3161	83.61%	154	37.68%
Non-level List	7252	100%	1462	100%

Note. 200 WL = 200 語レベル , 400 WL = 400 語レベル , 600 WL = 600 語レベル , 800 WL = 800 語レベル , 1000 WL = 1000 語レベル , Non-level List = リストに含まれない語彙

表７から Token（総語数）において200語レベルで中学校の検定教科書の約50％を，1000語レベルで80％をカバーしていることが分かる。一方，Type（異なり語）においては，200語レベルでは10％以下，1000語レベルでも40％以下である。このことは，中学1学年で非常に多くの種類の語彙が導入されることを示す一方で，小学校における学習語彙は，種類は多くないものの中学校の教科書においても繰り返し使用される英語の基礎となる語彙であることを示唆している。

それではどのような語彙がそれぞれの語彙レベルに含まれているのだろうか。以下では，200語レベルごとに含まれる高頻度語上位20語を抽出し，その特徴について考察する。

５．３　レベルごと高頻度語リスト

５．３．１　200WL の高頻度語

小学校の語彙リスト200語レベルの語で，中学校１年生用の検定教科書に出現する語彙上位20語を示したものが以下の表８である。

表８
200 語レベルの高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*I*	6	1933
2	*you*	6	1250
3	*is*	6	912
4	*do*	6	782
5	*to*	6	647
6	*it*	6	601
7	*like*	6	505
8	*my*	6	441
9	*he*	6	407
10	*can*	6	407
11	*are*	6	394
12	*play*	6	386
13	*yes*	6	380
14	*and*	6	367
15	*she*	6	366
16	*have*	6	348
17	*this*	6	336
18	*no*	6	313
19	*at*	6	295
20	*your*	6	295

表８によると，200語レベルの高頻度語は，最も頻度の高い I，you に続き，it，my，he，she，this，your の人称代名詞が多く含まれていることが分かる。また，is，do，like，are，play，have のような基本的な動詞が見られることも特徴である。これらのことから，200語レベルでは，人称代名詞や一般動詞，be 動詞のような，単元の内容に関わらず一般的に広く使用できるものが多いことが明らかである。

頻度ごとに見てみると，1933で I が最も多い。これは，一般動詞や be 動詞を使用して，自分のことを書いたり話したりする活動が，小学校と中学校で共通して多いからであると考えられる。２番目に頻度の高い you からは，Do you ～？Are you ～？のように，相手のことを尋ねる活動の影響があるのではないかと考えられる。また，it，he，she といった三人称単数の代名詞が多いことから，第三者について紹介する活動が多く含まれることが推測される。

動詞を見てみると，最も頻度の高い語は912の is である。これは，My brother is ～ . This is ～ . のように第三者や事柄を説明するときに用いられ，Is she ～？Is it ～？のように三人称単数の疑問文にも頻繁に使用されているからであると考えられる。同様に do も do

my homework や Do you ～？のように広く使われている語である。また，like や play の頻度が高いことから，自分の好きなことやしているスポーツを紹介する表現が多く出現することが分かる。さらに，can があることから，自分ができることを表現する英文や have を用いて所有物を尋ねたり，予定を尋ねたりする英文も多く出現していることが分かる。

以上のことから，200語レベルでは，小中学校で共通して，Ｉや you，he などの人称代名詞や is や do，like などの動詞を使用しながら，自分のことを紹介し合ったり，相手のことを聞き合ったりする活動に多く用いられる語彙や，学校でしていること，好きなことやできるスポーツなど，日常生活に関することを英語で表現する活動に活用される語彙が多く含まれていることが分かる。

５．３．２　400WL の高頻度語

小学校の語彙リスト400語レベルの語で，中学校１年生用の検定教科書に出現する語彙上位20語を示したものが以下の表９である。それによると上位20語には，時間を表す表現で用いる語 now，year，last，every，lunch，after，Sunday，morning や代名詞 her，his などが目立った。

表９から，not が最も多く出現していることが分かる。小学校では，I am not~ や I do not ～，This is not~ といった表現のように，自分や身の回りのものについて伝える際に用いられると考えられる。中学校では，さらにそれを be 動詞や一般動詞といった文法事項として発展的に扱われており，小中連携の形が見られる。また，not が高頻度語上位１位である理由のひとつとして，No, I am not のように返答をする際や，Do not~ のように命令をする際といったように，単元の内容に関わらず日常的に多く使用されているからであると考えられる。

表９
400 語レベルの高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*not*	6	330
2	*was*	6	188
3	*does*	6	177
4	*her*	6	117
5	*take*	6	108
6	*now*	6	100
7	*year*	6	91
8	*last*	6	89
9	*every*	6	85
10	*his*	6	77
11	*come*	6	73
12	*really*	6	73
13	*lunch*	6	71
14	*will*	2	71
15	*student*	6	67
16	*after*	6	63
17	*Sunday*	6	62
18	*by*	6	57
19	*morning*	6	54
20	*then*	6	54

was は高頻度語の上位２位に出現しており，I was~ や it was~ のように，補語を伴った形で頻繁に使用されていると考えられる。コンコーダンスラインを参照すると，good や exiting と共に用いることによって自分の感想を伝えたり，cloudy や snowy と共に用いることによって天気を伝える際に使用されていることが分かった。さらに How was your summer vacation? などのように，休日の過ごし方を聞く際に使用されていることも分かった。過去形の動詞 was だけではなく，未来形の助動詞 will も高頻度語の上位20語に出現している。was と同じく，rainy や sunny と共に用いることによって天気を伝える際に使用されていることが分かる。また，I will ～のように，これからすることを伝える際に用いられていることも分かった。

時制を表す表現で用いる語が高頻度語の上位20語に多く出現していると考えられる。まず，高頻度語の上位６位の now である。これは，現在進行形で今まさにしていることを表す際に使用されるためであると考えられる。次に，上位７位の year であるが，これは高頻度語の上位９位の every とともに every year のように習慣付いていることを伝える際に用いられるほか，next year や last year のように，未来や過去を表

す際にも用いられると考えられる。また，Happy new year. のように正月の挨拶で用いられることも，year が高頻度語の上位20語に出現した理由の１つであると考えられる。高頻度語の上位９位の every は，習慣的に行うことを伝える際に用いられることが考えられる。コンコーダンスラインを確認したところ every day といった使われ方が大多数であったが，ほかにも，先程挙げた every year や，every weekend，every Sundays などが見られた。上位16位には after が出現しており，after school や after dinner といった使われ方が多く見られた。これは，放課後や夕食の後，何をしているのかを伝えたり尋ねたりするためであると考えられる。上位17位には Sunday が出現している。これは，休日に何をしているのか，何をすることが好きかを伝えたり尋ねたりする際に使用されているためであると考えられる。上位19位には morning が出現している。これは，朝に習慣付いていることを伝えるための every morning という形や，今朝したことを伝えるための this morning という形でよく使用されていた。また，Good morning. のように挨拶の形でも多く使用されていることが分かった。

さらに，４位には her，10位には his が出現している。friend や family のような名詞を修飾する所有格としての使用が多いことが分かった。

take が高頻度語の上位５位に出現している理由としては，複合して様々な意味を持つ動詞であるからだと考えられる。コンコーダンスラインを参照すると，take a picture や，take a bath といった表現が多く見られた。

５．３．３　600WL の高頻度語

小学校の語彙リスト600語レベルの語で，中学校１年生用の検定教科書に出現する語彙上位20語を示したものが以下の表10である。

600語レベルの語彙リストの中で特に頻度の高かった語は good である。これは，会話表現で見られる Good morning. や Good luck.，Good job. に加えイディオムのひとつである be good at など様々な表現に用いられていることに起因していると考えられる。また good 自体が持つ意味も多様であり，He is a good tennis player. のように「上手な」という意味で用いられたり，I'm good. のように「元気な，健康な」というように多様な意味で用いられていることも，頻度が高くなっている一因であると考える。

次に頻度の高いグループに属している were は，文の内容に関わらず多く使用される語であるために，頻度が高くなっていると考察される。過去形を示す際の主語が you や we の際の肯定文や疑問文，否定文など幅広く用いられ，否定文においては短縮形の weren’t と共に were not という表現が記載されている教科書も見られたため，特に頻度が高くなったと考えられる。

表 10
600 語レベルの高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*good*	6	136
2	*any*	6	75
3	*were*	6	75
4	*TV*	6	74
5	*home*	6	70
6	*him*	6	60
7	*practice*	6	59
8	*movie*	6	55
9	*going*	2	47
10	*these*	6	43
11	*had*	6	42
12	*cold*	6	41
13	*night*	5	37
14	*homework*	6	32
15	*city*	5	31
16	*life*	5	30
17	*woman*	5	30
18	*pen*	6	28
19	*put*	6	28
20	*popular*	5	28

５．３．４　800WL の高頻度語

小学校の語彙リスト800語レベルの語で，中学校１年生用の検定教科書に出現する語彙上位20語を示したものが以下の表11である。

表11によると，800語レベルで最も頻度の高い語は，a であることが分かる。これは，800語レベルになると，a book や a cat のように単数形の名詞の前につける冠詞として使用されることが多いためであることが考えられる。また，a lot of や a few のように，連語として使われることも一因であると考えられる。

次に，in，for，of など前置詞の頻度が２～４番目に高いことが分かる。in は in April や in the morning のように時期や時間帯を表す際や，in Brazil のような場所を示す際に使用されるなど，幅広く使用されることから頻度が高いと考えられる。for は，for dinner や for

my brother のように「～のために」という意味で使用されることの他に，for example が多く使われることが考えられる。of は a member of the tennis team や one of ～のように，文を繋げるために使用されることが多いと考えられる。このように，800語レベルでは，in，for，of を使用して時間や場所，目的などを付け足したり，情報を追加したりすることで，長い英文が使われていることが示唆された。

表 11
800 語レベルの高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*a*	6	1078
2	*in*	6	515
3	*for*	6	218
4	*of*	6	214
5	*make*	6	71
6	*yesterday*	6	69
7	*weekend*	6	43
8	*week*	6	38
9	*classroom*	6	34
10	*open*	6	34
11	*need*	6	31
12	*sorry*	6	29
13	*work*	6	27
14	*sure*	6	25
15	*took*	6	25
16	*just*	5	22
17	*traditional*	5	22
18	*call*	5	20
19	*thanks*	5	20
20	*street*	5	19

また，800語レベルでは，yesterday や took があることから，過去の事柄を表現する場面も増えていることが言えるだろう。名詞に焦点を当てると，weekend，week や classroom など，限定的な単語が多い。このことから，週末の予定のことや学校や教室での話題が扱われていることが分かる。形容詞を見てみると，traditional があることから，日本や世界の伝統的な文化や習慣を話題として取り扱っている傾向が見られる。

上記のことから，800語レベルでは，小中で共通して，週末の予定や学校のことなど身近な話題に加えて，日本や他の国の伝統的な事柄を取り扱っていることが推測される。また，現在のことだけでなく，過去の事柄についてもやりとりをしていることも考えられる。

５．３．５　1,000WL の高頻度語

小学校の語彙リスト1,000語レベルの語で，中学校１年生用の検定教科書に出現する語彙上位20語を示したものが以下の表12である。

表 12
1000 語レベルの高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*the*	6	1230
2	*what*	6	428
3	*new*	6	132
4	*game*	6	98
5	*tomorrow*	4	61
6	*comic*	6	53
7	*near*	5	42
8	*during*	6	38
9	*got*	5	34
10	*pet*	5	34
11	*Ice*	6	29
12	*Early*	6	27
13	*Tired*	6	26
14	*Bought*	6	24
15	*Party*	5	22
16	*Bike*	4	22
17	*Anime*	3	22
18	*Bring*	5	22
19	*Climb*	4	21
20	*Green*	6	21

表12から，冠詞である the が最も出現頻度の高い語であることが分かる。コンコーダンスラインを確認したところ，the U.S などの国名や，I can play the trumpet. などの楽器名，in the classroom, at the entrance, during the summer vacation の the や all over the world, by the way のような形で使用されていることが分かった。

さらに new, tired の出現頻度が多いことから，様子や状態を表す語や tomorrow, near, during, early などの場所や期間，感情を加えた長い文章を作ることが求められていることが分かる。中学校の教科書では，小学校において，聞いたり，話したりできるようになった英文をさらに詳細に聞いたり，話したり，読んだり，

書いたりするようになることをねらった英文が多く使用されていることが示唆された。

次に got, bought に関しては，get や buy の過去形として使用されることが分かる。小学校では，現在形の方が多く使われるが，1000語レベルのリストに含まれているため，見聞きしたことがある程度に留まっていると考えられる。game, comic, pet, party, anime に関しては，趣味や特技などを言うことが挙げられる。また，これらは外来語として子どもたちに馴染みがある単語であると考えられる。

上記の単語は，小学校の語彙リスト1,000語レベルの語であり，言い換えると小学校の語彙リストの中でも低頻度語である。そのため小学校段階において習得するのに時間を要する単語であるが，小学校段階の学習語彙は600語から700語とされており，児童は1000語レベルの語に十分に触れる機会がない可能性が高い。中学校において，特に意識的に指導するべき語彙であると考えられる。

５．４　中学校独自の高頻度語リスト

表13は，小学校のリストには出現しないが，中学校の教科書に出現する語彙である。言い換えると，小学校の教科書では目にする機会はないが，中学校に入学して教科書を開いた際に初めて目にする語彙である可能性が高い。

中学校独自の単語として，oh, wow などのような，相手の発言に反応する際に使われる単語が挙げられる。Oh は，Oh, hi, Meg. Oh! What a cute dog! Oh, you speak Japanese. のように，挨拶の返事や，自分の感想を伝えたり，相手の言ったことを繰り返したりする場面で使われている。Wow は，Wow! How nice! Wow. Good luck! のように，相手に自分の思いや感想を伝えたりする場面で使われている。このことから，小学校では，自己紹介など自分自身のことについて相手に伝える場面が多いが，中学校では，より円滑なコミュニケーションを築くために，自分のことだけでなく，相手の発言に対して反応したり，繰り返したりすることが求められていることが明らかになった。

また，中学校独自の単語として，because, example などのような，理由や例を伝える際に使われる単語が挙げられる。このことから，小学校では，自分の好きなもの，得意なこと，将来の夢などを伝える活動が多いが，中学校では，さらに付け加えて，その理由や具体例を相手に伝えるような英文が導入されていると考えられる。このように，理由や具体例などより多くの情報を相手に伝えるために使われる単語が高頻度で用いられることも，小学校には見られない中学校英語教科書のみに見られる特徴である。

表 13
中学校の教科書にのみ出現する高頻度語上位 20 語

Rank	Word	Range	Frequency
1	*oh*	6	85
2	*an*	6	82
3	*fan*	5	62
4	*lot*	6	44
5	*cannot*	6	39
6	*often*	6	38
7	*wow*	6	33
8	*whose*	6	31
9	*mine*	6	30
10	*around*	6	29
11	*free*	5	29
12	*because*	4	29
13	*stay*	6	28
14	*yours*	6	28
15	*example*	5	27
16	*us*	6	26
17	*trumpet*	5	25
18	*manga*	3	25
19	*everyday*	5	24
20	*phone*	5	23

６　まとめと教育的示唆

本研究は，小学校において2020年度から教科として外国語が指導されることに伴い，『小学生のための受容語彙リスト1000』（佐藤，2021）の中学校１年生用の検定教科書におけるカバー率を算出することで，小中連携した英語教育の在り方を語彙の観点から量的に明らかにすることをねらったものである。その結果，現在６社から出版されている中学生用の検定教科書間において異なり語数，総語数ともに差が見られることが分かった。また，『小学生ための受容語彙リスト1000』の上位200語で中学生用の検定教科書の約50％を，1000語で80％をカバーしている一方で，Type（異なり語）においては，200語レベルでは10％以下，1000語レベルでも40％以下であり，小学校における学習語彙は，種類は多くないものの中学校の教科書においても繰り返し使用される英語の基礎となる語彙である可能性が示された結果となった。

本研究から明らかになった小・中学校の共通語は小

学校の学習を効果的に活用しながら，中学校の教科書のみに出現する語彙は，意図的にオーラルイントロダクションや small talk で教師が用いるなどインプットする機会を多く設けたり，それらの語彙を使わざるを得ないテーマの自己表現活動を導入するなどの工夫を行いアウトプットの機会を確保するなど，教師が指導の軽重を付けることが小中連携した語彙指導の第一歩であると考えられる。

参考文献

Anthony, L.（2020）. AntConc（Version 3.5.9）[Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from https://www.laurenceanthony.net/software

Anthony, L.（2021）. AntWordProfiler（Version 1.5.1）[Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from https://www.laurenceanthony.net/software

佐藤剛（2018）.「小学生のための受容語彙リストの開発」『JES Journal』第18巻，36-51.

佐藤剛（2019）.「小学生はどれだけの語彙を知っていればよいのか？－使用教材におけるカバー率の観点から－」『弘前大学教育学部紀要』第122号，107-116.

佐藤剛（2021）.「小学生のための受容語彙リストの開発－検定教科書から小学生共通の重要語彙を選定する－」『JES Journal』第21巻，54-69.

鈴木 雅美（2020）.「小学６年生における初期文字指導が中学１年生の学習意欲や音素認識に与える影響について」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第11号，27-36.

中條清美・西垣知佳子・吉森智大（2007）.「小，中，高一貫型英語語彙シラバス開発のための基礎研究」『外国語教育メディア学会機関紙』第43巻，23-42.

中村典生・末松綾・林田宏一（2010）.「小学校英語が中学校英語に及ぼす影響について：語彙の自己評価に評価を当てて」.『小学校英語教育学会紀要』10（0），25-30.

早瀬沙織（2017）.「小学校英語教育における４技能の視点からの「教科書１」分析：韓国・中国の事例を参考にして」『小学校英語教育学会誌14（01）』，195-209.

福島美枝子（2017）.「小学校英語と中学校英語の接続と連携に関する一考察」『富山国際大学子ども育成学部紀要』第8巻，89-99.

文部科学省（2008）.『小学校学習指導要領解説外国語活動編』

文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』

文部科学省（2017）.『中学校学習指導要領解説外国語編』

渡慶次　（2021）.「小学校英語教科書「We Can！1」「We Can! 2」の文型出現頻度と題材について」『名桜大学紀要』第26巻，35-46.

（2022．９．１受理）